

## 聞き書き「山梨県上野原市西原の一宮神社における農村歌舞伎」

<sup>1</sup> 本村あずみ <sup>1</sup> 森 貴久

<sup>1</sup> 帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

A traditional local play at Ichinomiya Shrine in Saihara, Uenohara

<sup>1</sup> Azumi MOTOMURA <sup>1</sup> Yoshihisa MORI

Saihara, which is located in north-western area of Uenohara in Yamanashi Prefecture, is a depopulated area. A traditional Kabuki play had been performed at Ichinomiya Shrine in Saihara for the autumn festival since at latest 1860s until 2001, and ceased to be performed since then. Interviews with 29 people living in Saihara held in 2009-2010 enabled us to collect information on the traditional Kabuki play. What is clarified in this article is as follows: (1) there were 3 types of play: a traditional Kabuki play performed by Saihara people, plays performed by a professional theatre company, and semi-traditional Shimpa plays; (2) during Meiji and Taisho period, most plays were traditional Kabuki plays performed by Saihara people, performance by theatre companies had become popular later, and the traditional kabuki play by Saihara people became popular again after 1980s; and (3) performance of plays for the shrine festival had become a hard task due to a change of life style in Saihara, which seemed to be the most serious cause for the interruption of this traditional local play.

Keywords : 村芝居 地芝居 素人歌舞伎 芸能史 上野原市西原

### I. はじめに

日本には農村歌舞伎・地芝居とよばれる伝統的な芸能が各地で伝えられてきた。多くが神社の祭礼の際に上演されて、そのための舞台も多く残っている<sup>1, 2)</sup>。多くの場所では昭和40年代以降にいちど廃れたが、一部の地域では、伝統芸能の保存の対象となったこともあり、現在も維持されている。たとえば大崎(1995)は全国の45カ所の農村歌舞伎の概要を紹介しており<sup>3)</sup>、山口(2006)は216カ所を全国地芝居一覧として挙げている<sup>4)</sup>。

このように数多くあった農村歌舞伎だが、山梨県

上野原市西原の原地区にある一宮神社でも、他地域と同様に農村歌舞伎が行われていた。一宮神社にはスギを主とした社叢があり、山梨県の天然記念物に指定されているが、農村歌舞伎で使用された舞台が境内の一角に残っている(写真1)。この一宮神社では、秋の祭礼の際に歌舞伎が上演されていたが、平成13年(2001年)を最後に行われていない。今回私たちは西原の住民に対してこの農村歌舞伎について聞き取り調査をし、およそ15年前に途絶えてしまった西原歌舞伎の概要を記録した。本稿ではその内容を報告し、西原歌舞伎の実態と変遷、西原に



写真1. 一宮神社の舞台

おける歌舞伎が果たしていた役割を明らかにし、西原のひとつの文化を学術的な記録として残していくことを目的とする。

## Ⅱ. 方 法

### 1. 調査地の概要

西原は、山梨県上野原市の北西の山間に位置する地域である。面積は 36.71km<sup>2</sup> で、これは上野原市の 29.6%にあたる。昭和 30 年(1955 年)までは北都留郡西原村として、旧上野原町とはべつの自治体だった。初戸・藤尾(藤尾・六藤)・古在家〔田和・上平・扁盃・下城・川通り(中群・真野・腰掛・平野田・阿寺沢)〕・郷原・原・飯尾の 6 地区から構成されていて、東部は上野原市桐原の梅久保及び小桐地区、北部は東京都西多摩郡檜原村、西部は山梨県北都留郡小菅村の永作地区、南部は山梨県大月市の七保地区・上野原市甲東地区の棚頭及び和見に隣接している<sup>5)</sup>。

西原の人口動態(表 1)は、文化 3 年(1806 年)が戸数 280 戸で人口 923 人、明治 33 年(1900 年)が戸数 235 戸で人口 1487 人、大正 9 年(1920 年)が戸数 327 戸で人口 1920 人、昭和 30 年(1955 年)には戸数 434 戸、人口 2427 人で、このときが西原のピーク時の人口となるが、昭和 45 年(1970 年)には戸数 419 戸で人口 1960 人と人口が減少し<sup>6)</sup>、平成 24 年(2012 年)には戸数 308 戸、人口 707 人となっている<sup>7)</sup>。

地区の大部分は山林に囲まれて、自然が豊かで、日当たりの良い比較的平らな場所や山の斜面を利用した耕地では、江戸時代から、主に自給用の麦、ソバ、ジャガイモ(西原では、「せいだ」と呼ぶ)、換金作物であるコンニャクなどを栽培している<sup>5)</sup>。今でも、これらの野菜や雑穀は作られている。西原の主要道路である県道 18 号線は、休日には東京都奥多摩方面へ抜けるツーリング客が多いが、平日は通勤の自家用車や、唯一の路線バスの通行がほとんどである。戦前は炭焼きや養蚕が盛んに行われ、馬や籠を使って物や人も運ばれたが、多くは徒歩での移動で、人や物の出入りは頻繁ではなかった。現在は過疎が進み、伝統文化や暮らしの伝承が衰退しつつある。

### 2. 調査方法

今回の聞き取り調査は、山梨県上野原市西原の原・郷原地区を中心に、29 人(原地区 18 人、郷原地区 7 人、その他 4 人)を対象として行った。対象者の年齢は 40 代から 80 代で、男性が 27 人、女性が 2 人だった。全員が西原での農村歌舞伎を観た経験があり、出演や裏方の役割を果たした経験があった。調査期間は平成 21 年(2009 年)9 月 17 日～平成 22 年(2010 年)1 月 22 日とし、対象者宅を訪問して、30 分～2 時間での聞き取り調査を行った。写真やビデオ、台本を残してあるものに関しては、許可を得て撮影、またはデータ保存形式を変えて保存した。

## Ⅲ. 結果及び考察

### 1. 西原歌舞伎の概要

一宮神社の秋の祭礼における歌舞伎は、聞きとりでは少なくとも明治初期まで遡ることができた。どのように始まったのかについては聞き取りでは明らかにならなかったが、その頃には一宮神社には舞台があったようである。一宮神社で上演される芝居を、西原の人々は「しばや」と呼んで親しんでいた。

上演された芝居には、「地芝居」「買い芝居」「新派」と呼ばれる 3 種類がある。「地芝居」とは、日常生活では農業や商店主、会社員などをして働いている人や子どもが舞台に立ち上演する、素人歌舞伎のことをいう。この形態の芝居は日本各地で行われていて、昭和初期以前から行われている歴史のある地芝居では、その地域の祭礼における奉納の意味を持つ。

地芝居で上演される演目は、「時代物」「世話物」の大きく二つに分かれる。この区分は一般的な歌舞伎の演目の区分と同じで、時代物とは時代設定を江戸時代よりも古い時代に据えた演目で、主に武家社会を描いている。代表的な作品には、「義経千本櫻」や「絵本太功記」などがある。世話物は、江戸時代が舞台となり、町のどこにでもいる大工や魚屋、遊女、長屋の衆などの人たちが登場し、町人社会や世相風俗を扱ったものをいう。演目としては「曾根崎心中」や「新版歌祭文」などが挙げられる。

「地芝居」が自分たちで芝居を演じるのに対して、

表 1. 西原の戸数・人口の変遷。昭和 30 年が戸数と人口が最多だった年で、これ以降減少した。

	文化 3 年 (1806 年)	明治 33 年 (1900 年)	大正 9 年 (1920 年)	昭和 30 年 (1955 年)	昭和 45 年 (1970 年)	平成 24 年 (2012 年)
戸数(戸)	280	235	327	434	419	308
人口(人)	923	1487	1920	2427	1960	707

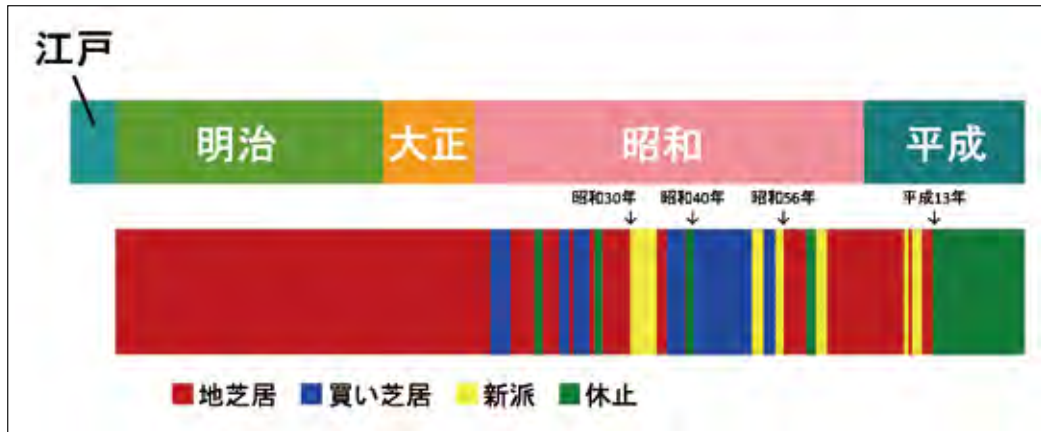


図 1. 西原歌舞伎の変遷

「買い芝居」は、本職の歌舞伎の一座を買って、自分たちの地域で歌舞伎を公演してもらう芝居のことである。この買い芝居による芝居も珍しくなかった。

また、「新派」は演技と演出に歌舞伎の影響が強く出ている現代劇のことをいい、しぐさや衣装といったものは歌舞伎に非常に近いながらも、話す言葉は現代劇に近いといった芝居を指す。新派の演目としては、「婦系図」や「明治一代女」などがある。「新派」は演目の分類であり、買い芝居の一座が新派を上演することもあれば、西原の住民が新派を上演することもあった。

これらの3つの芝居が明治初期から平成13年（2001年）まで、何度か中断を介して上演されてきた（図1）。聞き取りによれば、明治から昭和初期までは「地芝居」が上演され、その後に「買い芝居」が何度か上演されるようになった。「新派」がはじめて上演されたのは昭和30年（1955年）頃である。戦後は「新派」と「買い芝居」が多くみられたが、昭和50年代から平成にかけて「地芝居」が再びよく上演されるようになった。最後に上演されたのが平成13年（2001年）で、その後の上演はない。

## 2. 明治から昭和40年代ごろにおける歌舞伎

聞き取りから判明した当時の歌舞伎上演は以下のとおりである。明治から昭和初期の頃には、毎年9月17日夕方18時から18日の朝5時まで歌舞伎を上演すると、18日の昼間に神輿を担ぎ、その夜から翌日19日の朝まで再び歌舞伎を上演していた。公演の際には、西原地区はもちろんのこと、上野原、桐原、小菅の辺りまで招待状を配っており、そのため多くの観客が集まった。客席があふれたために舞台の柱を動かし、位置を4m下げたこともある。この時期に、現在もある一宮神社境内の便所が作られた。公演日に

は神社の境内に露店が30店ほど並び、普段滅多に見かけないおもちゃや食べ物に多くの人が胸を躍らせたようである。この当時は、女性も多く役者として参加していたという証言がある。いわゆる「商業歌舞伎」では女性が舞台に上がることは禁じられているが、この一宮神社で行われていた歌舞伎ではそのような決まりごとはなく、西原地区全体でこの農村歌舞伎という行事に参加していたことがうかがえる（写真2）。



写真 2. 昭和23年当時の地芝居の様子  
(昭和23年9月撮影, 原嶋勝栄氏所蔵)

聞き取りによれば、歌舞伎の上演は戦時中も行われていて、戦後は兵士として召集された人たちが復員して一層盛り上がった。家族総出で観に行くものだった歌舞伎は、当時では一大イベントであった。夜中行う歌舞伎を観るため、大きな木の箱におにぎりやいなり寿司を入れ、ブドウやナシを持っていった。急斜面のため稲作ができないこの西原の住民にとっては、お米は行事ごとや冠婚葬祭といった時でしか口にできないものであった。「子どもの頃に歌舞伎役者の化粧顔を見て怖くて泣いた」、「子どもの頃から楽しみにしていた」等、当時の記憶が残っている人が多く、子どもたちにとっても楽しみにされていた行事であったことがわかる。この時代は西原小学校の同級生が80人や100人いた時代だったので、子どもたちによってさらに活気ある祭りとなった。

芝居を運営していたのは一宮神社の氏子青年だった。この氏子には、原、郷原地区だけではなく、飯尾、扁盃、下城の各地区が入り、若い人の力は大きいものだった。組織は各役割に積極的に取り組む若者たちと彼らを指導する大人で構成され、十代からおおよそ七十代まで幅広い年齢層で運営されたと思われる。特に主役は花形と言われ、若者の憧れであり、活力となっていた。この当時は現在のような通信手段はなく、普段もほとんど限られた範囲内での生活だったため、他の地域から大勢の観客が来るこの西原歌舞伎は、男女の出会いの場としての意味も持っていたという証言もある。主役や役者として舞台に立った人は名が通ったため、余計に若者たちの憧れが強かったのかもしれない。

電気がなかった時代は松明を焚いて芝居を上演していた。電気が通ってからは、毎回電気屋に頼んで電球を舞台に設置した。一度舞台の梁も替えたことがあり、このような設備費、衣装代、稽古代など結構な資金が必要だった歌舞伎は、その費用を観客からの花代で全て工面していた。花代は、昭和の終わりのころには、一人三千円、五千円、一万円、二万円となっていて、金額はその家の事情を考慮して設定されていた。芝居を観に来られない人も花代を届けていたようで、総額では百万円近い金額が集まっていたという。

買い芝居は戦前から行われていたが、これは現在の山梨県大月市猿橋にあった大原長之助一座を買っていたという証言があった。地芝居を行う際にも、演技指導の師匠、当日の衣装に化粧、三味線を弾く者、義太夫などを一括して、この大原一座に依頼していた。歌舞伎を行う二日間は、原地区の風呂場がある大きないくつかの家に一座を泊めて世話をしたという。多く

の調査対象者からこの名が聞かれたことから、認知度が高く、西原に多く訪れたことが推測できる。

歌舞伎が上演される9月は台風や大雨がよく重なった。雨が降ると氏子青年が裸で川へ入り、御幣を持つ二人を取り囲んで水をかけ、雨がやむのを祈ったという。歌舞伎を観る観客席というのは、普段は境内の砂地だった。そのため、歌舞伎を行う際には西原で収穫した麦の殻を敷いて御座をつくり、各家々で御座、座布団、布団を持参して座った。麦の殻は、原地区のみ自家生産のものを持ち、他の地区の席には事前に氏子青年が各家を回り集めたものを敷いておいたとされる。この麦殻は貴重な畑の肥料となるため、歌舞伎が終わった後は競い合うようにして手元に集め、取った分だけ持って帰れるという決まり事があった。また、上演時には雨風を防ぐ大きな天幕を張っている。これは氏子たちが寄付し合い特別に作ったものであり、現在も原地区にある集会所の物置に保管されている。

歌舞伎の舞台づくりなどの準備は、氏子にあたる地区の一家から一人、もしくは男手になる人全員が集まり作業をした。大工や林業に関わる職人が多数いたため、天幕を張るために必要な柱を立て、柱に登り、そこに梁をわたしてロープで支える作業を、一切機械を使わずにできた。舞台は廻り舞台の形式で、間口10m、奥行き7mの大きさである。下手2mは楽屋、舞台中央後ろの壁は4m程開いていたが、現在は改造してある。回転盤の直径は3.5m、中2階と下手2mは衣装や化粧を変えるための楽屋であり、義太夫が座る席と三味線弾きのいる席もあり、花道は組み立て式となっていた<sup>8)</sup>。客席をより広く取るために、拝殿の前と正面に段を作り、子どもたちが観る席とした。

### 3. 昭和40年代ころから平成初期における歌舞伎

昭和40年代以降には、一宮神社の歌舞伎の公演日は固定ではなくなり、9月17日、18日付近の土曜日、日曜日に移った。また時間帯も夕方18時から行われて夜の12時には終わる年が多くなった。これは、原の道に街灯がついたことで来場した観客が夜間でも無事に帰れるようになったからという証言もあり、西原での生活の変化が見受けられた。

高度経済成長期を経ると、西原への道が整備され、バスが通り、テレビや映画、ラジオといった娯楽や外の地域の情報を取り入れられる物が西原内にも徐々に浸透してきた。かつては養蚕や炭焼き等を家族全員で力を合わせて行っていたが、徐々に次男や長女は町



へ働きに出ることが多くなってきていた。その影響で、歌舞伎を運営する氏子となる若者や役者が減り、昭和40年(1965年)頃以降は買い芝居を行う年が多くなる。この当時に働き盛りだった年代では、歌舞伎を観たことはあるが実際に参加したことはないという回答が多く、町への出稼ぎによる人口の流出は西原歌舞伎の実施に影響していたと考えられる。

買い芝居を契約する一座は、以前からの大原長之助一座の他に、東京都八王子市の音羽会(田倉氏)や一二三会(若草緑氏)という新派を専門に扱う団体が対象になっていた時期があったという。西原では、その年にどこの座が一番安いかを検討し、買い芝居の座を決めていたという。この当時は、すでにどの地域でも歌舞伎や芝居は盛んではなく、音羽会に行くと普段は田倉氏が一人でいて、契約が決まるとその時だけ役者を集めて芝居で各地を回っていたとのことだった。他にも、歌舞伎の一座が解散して使わなくなった衣装をレンタル商品として商売をする商店もあったようで、このころ各地での農村歌舞伎の衰退は目に見えて明らかとなっていた。

しかし、そうした苦労の上に上演した買い芝居も、昭和54年(1979年)頃にはあまりにも客席がうるさく、芝居中に役者が、「ちゃんと観ないなら来年から来ない」と怒るなど、歌舞伎の娯楽としての場が宴会に近いと思ったという証言もあった。そのような状況の数年後、芝居が終わった後に座敷洗いの場で年配者が若い衆に言った、「わけえ衆どうだ? こんな芝居買ってくるより自分らでやらねえか? 昔は俺らもやってたんだ!」という言葉が、新派を自分たちでやるきっかけとなった。西原では、現在も酒の場で物事の話が進むことが多く、西原の人の気質がうかがえる。そこで郷原の一人を代表に、新派を行うこととなった。しかし、その芝居に対し客席の反応は薄く、多くの人が舞台に背を向ける形で酒を飲み交わしていたという。

それでも自分たちによる上演がきっかけになったのか、歌舞伎に非常に詳しくて太夫の才能もあった、東京に勤める原の住民の一人が人を集めて地芝居に再び挑戦することになった。そして昭和56年(1981年)以降、平成13年(2001年)に途絶えるまでの間は、新派を数回まじえながら、基本的には地芝居を続けて公演することができた。

復活した地芝居では、子役が出演するような演目は人気が高く、親子での参加が多く見られた。記述のように、一宮神社の歌舞伎には「女人禁制」というルールはなかったが、原の女性から出てみたいと

いう希望はあっても、実際には誰も出ようとはしなかった。練習が夜や日曜日に行われることが多く、女性は参加しにくい時間帯となったことも、女性の出演が困難だった理由とみられる。この地芝居を始めた頃からは西原で家庭用ビデオカメラが普及し、家庭によっては我が子の勇姿を録画し、ビデオテープ(VHS)で保管しているところもあった。練習でも、師匠を呼ばずに歌舞伎のビデオを購入し、それを観て行うようになった。客席は以前のように人で埋まることはなかったが、新派の頃に比べ観客が舞台上の台詞に聞き入ってくれているのがわかったと、その当時に出演していた男性は話した。

このように、一度は住民が演じる地芝居として復活した西原の歌舞伎だが、昭和の終わりからは1日だけの公演も多くなり、繰り返している通り平成13年(2001年)の公演が最後の公演となっている。それ以降、何度か復活できないかと寄り合いが開かれているようだが、現在まで一度も形となることはない。ただし、その後も一宮神社での神事は続けられ、聞き取り調査後の平成27年(2015年)の時点でも、9月には一宮神社で神輿は行われている。

#### 4. 歌舞伎が衰退した時代背景と西原における歌舞伎の位置づけ

地芝居には練習が必要だが、昭和50年代以降の話の聞くと「上野原から練習に通うのはしんどい」、「仕事の後に夜遅くまで練習する」といった、練習に対する負担の意見が出ている。昭和50年代以降では、歌舞伎で役を担うような西原地区の人の多くが職場を上野原の中心部や東京方面に移していたことがわかる。普段の生活に歌舞伎の練習を取り入れられないことで、休息など自分の時間を削って練習していくことになるため、歌舞伎を行っていくことに体力や時間の面で無理が生じてきたことが、平成13年(2001年)を最後に歌舞伎が途絶えてしまった大きな要因かと考えられる。

この途絶と表裏一体なのが、明治から昭和中期の頃の話の聞くと出てくる、「セリフ合わせは炭焼きをしながらやったよ」、「台本は畑で覚えたんだ」、「畑をしていたから雨が降れば歌舞伎の練習をした」等の数々の証言である。農作業や養蚕、炭焼き、山仕事というのは、企業活動のような時間や空間に縛られたものではなく、各家々で生産し、自然や災害、天候と密接に関係し、それらに左右される生業である。そのことが歌舞伎の練習を生活に取り入れられる大きな要因であり、この当時の生業のもとで西原の人々は歌

舞伎のある暮らしを楽しんでいたようである。

このように、一宮神社での歌舞伎の上演には、とくに自分たちで演じる地芝居の場合、いかに日常生活の中に準備期間を取り入れられるかが関係していて、現在では取り入れることが無理な生活スタイルへ変わってしまったために歌舞伎の上演が衰退したと言える。このような事情は他地域でも同様だろう。

また、時代による歌舞伎の位置付けの変化も衰退の要因となり得る。自然と密接した仕事が多い西原地域の土地事情は、傾斜地が多く、面積が広くとれないという特徴がある。同じ種類の作物を同じ土地にたくさん育てられない、機械が入らない等から生産性が低く、効率の悪い土地柄と言える。そのため、1日中、1年中働き続けることで生計を立てることになり、娯楽とよべるようなものは減多になかった。

この厳しい生活スタイルは、西原の食事の回数や名称として残っている。朝食前にアサヅクリと呼ぶ早朝の仕事があり、「朝ごはん」、「コビル」、「昼飯」、「オコジュウ」、「夕ご飯（ようなご）」、「夜食」と細かい間食をはさみながら1日中働き通すような暮らしであることがうかがえる。さらに、年間に西原の仕事を見ると、春から冬までの間、農作業や養蚕、茶摘み、炭焼きなど季節に合わせた仕事を行い、「農閑期」と呼べるものはなかった。

このような暮らしぶりの中での歌舞伎は1年に一度の唯一の娯楽となっていたと考えられる。役者、観客、露店や食べ物、準備や練習といった要素全てを娯楽と受け止めていたことが多くの話から推察された。その一方で、歌舞伎の上演は規定事項ではなく、「今年は歌舞伎をやるかやらないか」と寄り合いが毎年開かれて決定されていた。このことから、この時期を楽しみにしているが、毎年絶対に続けていかなければならないという決まり事や意識はなかったことが窺える。その背景には、まだ人口が多く日常生活が西原に密着していた時代には、この文化が途絶えることへの危機感が希薄だったということがあるかもしれない。

これらのことから、西原の歌舞伎は、一宮神社への奉納の舞いという意味を含ませながらも、あくまで西原の人にとっては大切で楽しい娯楽という位置付けだったことがわかる。そして、その娯楽は、普段の生活の基盤があってこそだと言え、それは当時の生活環境の厳しさを物語っていると考えられる。

だとすると、西原歌舞伎の復活には、現在の西原地区住民の生活環境において歌舞伎を上演することの位置付けが適切になされることが必要となる。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、調査で貴重なお話をして下さった西原のみなさま、上野原小学校校長岡部平和先生、支えてくださったみなさまに、心よりお礼申し上げます。

## IV. 参考文献

1. 景山正隆：愛すべき小屋 村芝居と舞台の民俗誌，p.13, 冬樹社，東京，1990.
2. 角田一郎 編：農村舞台探訪，pp.167-216, 和泉書院，大阪，1994.
3. 大崎紀夫：農村歌舞伎，pp.129-134, 朝文社，東京，1995.
4. 山口清文：日本地芝居写真紀行，pp.200-201, 河出書房新社，東京，2006.
5. 岡部平和：古在家の神楽舞：西原に伝わる無形民俗文化財，上野原市立西原中学校，上野原，2008.
6. 古屋武雄 編：上野原町誌，上野原町誌刊行委員会，上野原，1975.
7. 上野原市役所：上野原市のデータ，上野原市，上野原，2013.
8. 水木 亮：朝日新聞 1997 年 8 月 27 日の記事，1997.